

Kodak
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
A							B	19



西新莊子

15

特
 13
 332
 4止





Faint blue markings on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.

曾 115
佛 332
卷 4

曾 115
佛 332
卷 4

面影北莊子卷之四目錄

三 猿會心

蚊 子議和

仙術真訣

莊子趣意

手のひら

明治三六年十月十三日
坪内加茂
氏寄贈

面影莊子卷之四目錄

面影莊子卷之四

○之猿今心



山王乃猿さるも佳あまありて庚申こうしん待まちをしらら親おや
 猿さるがまはら今いま夜よのま鹿かをしてまじべを
 ぬらりのどく猿さるのまをた捷はやをまめ
 うらもの氣きをくらまをすべしとして
 一い之し乃の猿さるのまをめて見猿さると

ちりり一丈の耳を塞ぎしは猪とちりり一丈を
口を杖とて言猪とちりり親猪と云庚申待
にハ孫花おまじりせにハ下馬の庚申ハ神
道にてハ猪田彦余をハ神多りハ一併はふ
てハ青面金剛とハ猪田彦とハ下馬の縁に
よりて猪田用ゆりら然もたけりハ神道の物
にも併道の物ふも非ず道家の物也人ハ
男に之ハ虫とハ虫あつて此虫ハ人の善悪

を庚申の夜にハ下馬へ告りし人庚申待と
して寐されハハ虫告りし人破り守とちりり
ハ各別汝が見猪とちりり心ハハハ見猪ハ
眼ハ法教の媒也此乃金銀財寶を以て
貪欲の念ハ起ハ此乃婦の身ハを以て
陰教の念を起ハ遂ハ不義不道ハ實
に落入ハ身ハを強ハ目ハハハ物ハハハ
て悪念ハ萌ハゆハハハ見猪ハハハ

西島新編 卷之四

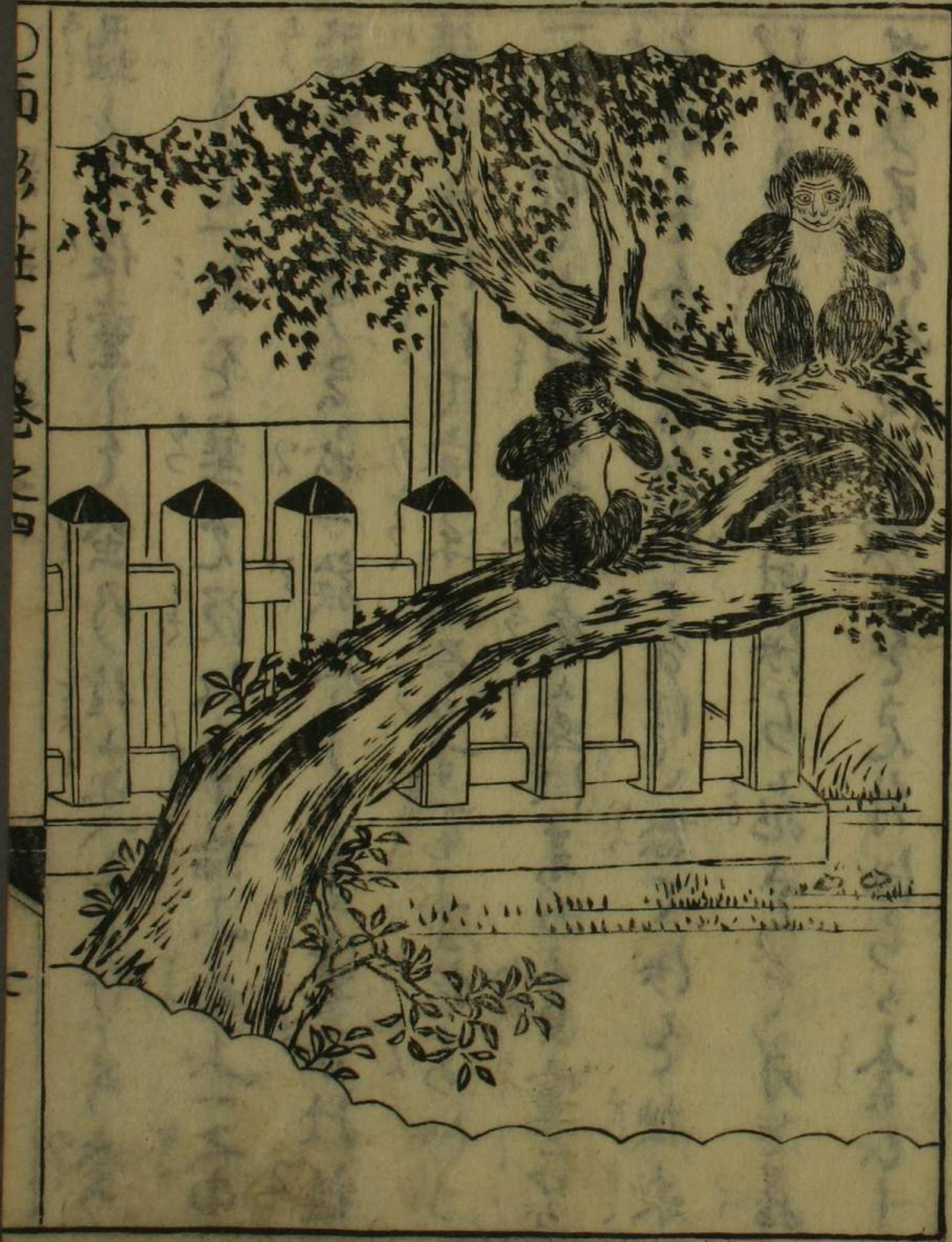
言猿也親猿が云はらぐらふ不依れ世間
 處して人と接れ乃要後也といふもま
 玉極といひがく眼の物を見耳の音を
 以て言が其職をた眼にて見るに非ず耳
 して以て非だにめて言に非だ見るに
 非べきもの乃乃内に在るは
 らぬや否や内に在る耳口を塞てふと
 のを防ごもや内を守るの要道に
 といふ

内に防ごも我一心頭に見猿は猿言
 猿乃之猿を止むに玉ば眼にて見る
 不耳にて言不を此之空乃法教を
 内を固守る之猿が防ごをりて今
 らの心法を絶に砂糖をえて其
 心我の眼のみに此も也其甘
 小不を防ごべしこそ禪家
 所謂心の

路を封じり旨たりびり或人平生に字を
 一しり書物を度に積て焚捨んとす人
 乃禱傍が云汝何とて書を焚て彼人言て
 云佛書ハ不浄を拭小の紙屑たり儒書ハ
 聖人乃詞の權をり今もてハ後に文字乃
 上に於て道を求む我文字の上に道あり
 とも書を自得せり故に焚捨んと思ふ
 たり禱傍が云汝書を焚たどとて汝が腹

中乃書物を乞ふべしとつりこもつれ味
 を甘あひまは眼耳口を塞に及びすと
 世の上乃子猿洞をさうて云親父ハ何
 猿にあると思ひや親猿が云我ハ何事
 とも不思議にもるべし口の鼻の如し眼ハ耳
 乃如し耳ハ尻の如せば遠くして可なり

○蚊子議和



○
山景十景
卷之四



○
山景十景
卷之四

孔蝨ども後黨して蝨乃任家へたうけらる蝨
 とも色一類を集先況に事論小及よ一丈の
 孔蝨遊如多言我一族久しく分貝窠子此禮
 隣乃中に位で安系に言寸可小夜あ汝が
 一類我々が任家へ不遠直に來り分貝窠子が
 を傍を合ふゆへ彼もほご怒て汝を捜求
 びりまゝ急たう其時汝ら飛らうて身を藏
 せり不仕合にて我々をえ付汝らが食い

ぞ我々が口ごとと思ひ彼がよに食うて我々
 族を柵殺させらるこも汝が罪咎を我々
 に嫁よを多塵埃乃中に潜まりわづれて
 我々が穢穢系じ密後也毎交汝が口ざり
 して我々が横難を交親もす念心子方也
 今より後我任家へあつ中じさや吾やさも
 ろくば子も親者へや上り汝らを急度糾
 合とぶしと信うけらる蝨のたより一丈飛出て

云汝らも我れも人を血合して性命瓜分す
 不の相日ト云るは夜あのみすの我れが仲間
 への非守はが仲間を詮答とべし且又我れ
 も人を血合とせども其れを和て厭まで
 にせば人を恐るがゆへ害に及らざるを
 是はらの厭むる事を知る食らるが上りも
 命の腹の無き時をとりて虫に化してあはる
 りさるぬまで喰付人をえても逐つれざる

由人のまの摸死せり也汝ら何ぞ我れを
 ひらの深やし楽に事論の好帯忽然と
 て翼を敷し一是乃虫飛来つて云我れを
 圃に任蚊とらふの也汝ら何ぞ我れを
 天地造化の理微ちりしるは胎卵湿化
 の四生を道に蚕の埃よりけりて埃に任虱
 の垢よりけりて垢の中に任借に相並んで人
 を血合せり蚕の其性壯強ありて我れにして

危こひの入りぬのゆ術うづを得えらゆ人ひとに殺ころすま
 とくくありきた子を産うみ孫まごをけしとらま
 まとくは又また孔くわん虫ちゅうの其その性せい柔じゆう弱じやくゆて危こひゆ
 の術うづを得えらゆゆ人ひと害がいにあつまらぬと
 とく絶たつ續つづ繼ついで禳たがひ乃の中ちゆうに子こと孫まごと孫まごと
 れゆ蚕あひよりより百ひやく倍ばいちよ一ひと我われの活せつ漢かんの子こ
 の意い化かちり鬚すとらとく翼よくあつと母はは危こひ
 自在じざいを得えらゆ人ひとはらとくいとらとふ人に

割わせしきだまらぐ世よの後ごにも蚕あひれ四月
 扱あり五月三月のたえ虱しつの其その時ときの益えきちり
 を林はやしとら初はつめれもはらり四季しきにあらと
 壽じゆう命めいあ一ひと我われのと夏あつ花はなそのととらてま
 むとととらとら我われの其その經きやう命めいを致あかすはらに
 我われは南なんと北ほくと一ひと我われの人ひとに制せいせしとらと
 とくいとら今いまの今いまもととら我われははらら
 如ごとく四季しきを還かへり壽じゆう命めい致あかすはらに十分じふぶんたき
 如ごとく四季しきを還かへり壽じゆう命めい致あかすはらに十分じふぶんたき

東門子仙術を學びしとありぬく深しき
 言を授けおしむも仙書に記せしや
 まは仙人らしき者にもおしすはるるにて
 仙術を學んで仙にうつり東門子と云ふ
 同のま命を百歳の遠す七十古を稱也
 と云ふ永壽と云ふに足は傳ふ仙人の
 不老不死のの也危騰ア解の術と終行
 して雲に乘風は御し、帝に大いに官を

授け仙の樂と云ふに如ん古より仙人
 と云ふの列仙傳に傳ふに書つる日々
 にても帝陸防海軍又の在立中將業平
 ちと仙人にありたりとい傳ふもたりの仙
 人もに書面をてり人もちとそは仙術
 の道家者流りものちり道家の不老不
 死とて遊するものもたりに如ん今と
 りんを考るるに何回も在やた子を

老子もの求めに求むるは老子の故に死し
 て跡を以て仙術家の指にとりて其の
 乃在位百十一年也孔子の七十にして
 之とちり釈迦の事には生不滅を説た
 跋提河の流と清らき一河七十九歳たり
 老子の死して七十の壽ありと云ふ
 捨りて九十歳にて死するはと云ふの聖
 賢皆死を免れず涯あるもの故に涯あれ

ば死する期あり況に涯ある性命をとりて
 涯を死不寿不死を求めんと云ふは生
 壽の法術を修するもの生を欲して死を
 恐るる眩病と云ふ病のついで也万物の
 より今日今日に借用し死して今日今日
 に返すすたといふ不寿不死の仙人ありとも
 彼らの生を借るに以て天道へ返還せざる
 横羨もの也生を崩壊也壽命の長短何ぞ

自然にはうせざらざるやうにそと仙術と學
 い保せしめりる夏冬をうに木の葉衣り
 肌をぬるは木乃実と合しありいり芳と
 欣を履を食い雲を駕あしてそあつたふ
 風を馬しして馳あつて身にて息を教導
 賢を進んで世容の役にまづき使はるく
 大虚乃中の造蕩ちる木の葉衣をいそせ
 んより木棉の古袴にて足ぬべしと旨味をい

ひ子履を食りんより柔靡にても難頼あて
 も性命を考ふべしあつた雲にそあつた
 うんより駕昇の肩にて危ゆるとべし風に
 御せんよりの駢賃馬にそあつたけちりり
 風に御して危あつたらとよの後の風う
 い非ず風のそ散を心の物ししてあつた
 い有物也散によもばそ物也有その同り
 へして吹あそども蘇ちく吹まど散を



○ 風景十册子卷之四

止先に悟澄澄のり之北を風に御は
地に男を處くか風に御とらとらよ也
今世が為ふ不老不死の事義を明に
べしそ色孔老殺迦の之教の祖師と
ふの之才の嬰童も其之聖賢とら事と知
て數ふ年の今もぞも其徳目とら輝と
月とに光海とら其名朽に滅せ守老に死
せずこそを後の不老不死とらよとら別

して老子の仙人道乃元祖の事ども危
戸解乃術ありとらも虚空を飛移せし
ト実ち一人百二十歳を造り死せざる
を久壽乃女と名付て人中の怪物なり
此遠怪物とらんととらとらや仙術を用
ちとらとらとらとらとらとらとらとらとら

○ 老子の趣意

汲をこり鶴つて移んりて拈くろを鶴回て云
 世例の看経とらりさるくば何乃ユまをら
 とり鶴が云我状子に拈り恋あり佛氏
 の云因不道と破し傷士の吳端乃雄長
 とお捨くろこも聖人をさんく移戻り
 後了買人の頭を拈へ仁義乃教をり
 て塵埃のどくろりさるるも塵をの塵塚
 へ拈捨氣流氣候乃舌を鼓く文下れ人

を驚異へせしむるにやうてあらんともうんども彼
 色一時の豪傑ちよ色は定まら一文餘貫乃
 上肯趣あらんまをユまをり也あ病が云夜子
 内不之十之を補教方言の文く句く千載独
 歩乃筆筆録を運くく物に候まに托
 して云微の寓言奇致の譬喩くこと撰
 とれば自然り二字に遣はらんとも虚を
 の自然を従ふとを趣えんとるにいわるに

孟子の時代に先王の仁は漸増する人の
心悪くする徳の多く邪知さうんあつて
片うそを誣し子として親を害し家
に争闘して仁義の道絶つるに古昔れ賢
朴はより性の徳ある時代と見合ては
あるを教へむしめ賢朴は後しうんや
思ふに在賢朴して糸飾りたけしきこの性
よく自然の性也孟子の性善の説と暗に

相夫右に堯舜れ子ちんどの法聖人と對
ひぬにとる彼其聖人より事をあらせし
自分乃論説を益て大にせんがみ也又
乃徳を多しむ世間の人心と矯るをこと
しうに及んず不経義湯の行多く矯るる
ゆんちり故ふれ子と十之や論の説を非じ
て其意味を是とするもの一双眼を具て
よく孟子の讀ものこととてしれ子と

孟子の性善論

聖人をあつらふに報に終篇に仁を
 ろうしむ君と一義をのりて性より礼と
 て終より樂及びその知と一義終
 て意にあらるるをその子とらふと詩の
 身志をその書とらて其をその礼とらて
 終及び樂とらて和をその易とらて後湯
 とその春秋とらて其分をそのとらてその
 語味に即ち其知るべし其子の聖人を推尊

び其遺經を遺書とす明向たること
 孔子の六經を從也といふに非とも
 吾同糸道と難破といふ大極佛氏
 として万化の根え不化と不滅の真知は性
 佛を期に故に之を唯一心万法唯識とこ
 是をその子の空界の一氣を大極と
 万化の根え一眞の實性と此間に於て
 有け滅幻妄のはくを証其方より佛氏を

一心を以てして一子の一氣を以てしてその
道日ト、何ぞれバ見量と云ふ者なり。氣を以
て為に、子ガ面影を以て、その也。是非の評
論の後、識者を俟と、いつて、終つて、あるハ
うも、色、形、りりり

面影荘子卷之四 大尾



東京日本橋區
須原屋茂兵衛
通堂百十五番地

